

「印象」という鎖を解け

高崎市立佐野中学校

三年 島田 七椿

「えっ、この子が転校生？」

教室の空気が一瞬で凍った。僕が今の学校に転校してきた日のことです。あの教室は、音がないのいうるさかった。「視線」も、「空気」も、全てが僕のことを拒んでいた。

二年前、僕は前の学校を辞めました。正直言って間違いなく、「問題児」だったからです。授業を抜け出して先生に反抗して、夜遅くまで帰らなかった。でもその裏には、家庭のこと、人間関係のこと……誰にも話せなかった苦しみがあって、ただどうしていいかわからなかった。ただ、それだけなんです。

でも、人はまず「印象」で判断します。「怖い。」「やばそうじゃん。」「そうやって簡単にレッテ

ルが貼られ、距離を取られる。やがてそのレッテルは「偏見」という鎖になるのです。

転校してからの僕もずっとそうでした。話しかければそっけなくて、距離を取られた。そんなある日、学年の先生が、「本当は島田はいい奴なのに、過去のことだけで悪く思われてしまうのが辛い。」と言いました。その言葉がぼくの心の「何か」を変えました。そこから、「僕の『印象』という鎖を絶対に解いてやる。」と、心の中で強く思ったんです。

でも、現実には甘くなかった。毎日が苦しくて、何度もうじけそうになった。けれどそんな時、ある一人の友達が言ったんです。

「前がどうか知らないけど、今の島田、普通にいい奴じゃん。」と。

たった一言だけど、その言葉が僕にとって「希望の一言」だったのです。

そこから僕は少しずつ行動を変えていきました。

誰よりも早く教室に行って、椅子と机を揃えて、自分から明るくあいさつをする。すると少しずつだけ

ど、周りの反応が変わっていった、僕のことをちゃんと「今の僕」で見てくれる人が増えてきたんです。

ある日の国語の授業で先生が、「印象は判断材料」と言っていました。確かにそれは正しいのかもしれない。けれど僕は、それだけで人を絶対に決めつけたくない。なぜならそれは本当にもったいないことで、その判断で「その人の本当の姿」を見逃してしまうかもしれないから。

今年、僕は学級委員になりました。なった時は、冗談交じりで「えっ、あいつが学級委員。」「信じられない。」と、とにかく驚かれた。けれど、今は僕のことをそういう目で見える人はいない。少年の主張で代表に選ばれた時には、「お前、変わったな。」「めっちゃよかった。」と言ってくれる人がたくさんいました。

だからこそ僕は、「人は必ず変わる」と、強く信じています。変わろうとしている人をちゃんと認めて、印象だけで切り捨てずにその人の「今」を見ることのできるクラス、学校、いや、そんな社会を作って

いきたい。学級委員になったのも、その思いがあるからです。

そして、かつて僕が救われた「希望の一言」を、今度は僕が渡したい。そして、「たったひと言でも人は変わる」と伝えたい。それは、特別な人にしかできない事じゃない。「頑張ってるね」とか、「いいじゃん」みたいな、さりげないひと言が誰かの「希望の一言」になるのです。「希望のひと言」を渡せるのはあなたかもしれないのです。

最後に、質問します。

あなたは、それでも人を「印象」という鎖で縛りますか？ それとも、その鎖を断ち切る「希望のひと言」をあなたが渡しますか？

